

さらば、愛おしき日々よ

（麻倉次郎吉 愛の物語）

構成
作

鳥居和真
スズカチヒロ

登場人物

麻倉次郎吉
石崎久美子
平塚佐助
五十嵐美波
後藤若社長
優菜

零場

平塚、入り。

平塚

人生においてライバルってのは、これが面白えことに、憎くってたまらねえ存在のはずなのにどうしてか世界を彩ってくれたりする。俺とあいつは、言うなればライバルだった。決して交わることなんかしないのにおかしなもんだ。刑事と盗人。な？ 交わるわきゃねんだよ。でも、あいつは特別だ。麻倉次郎吉は特別だった。

平塚のケータイ電話が鳴る。

平塚

はい、平塚。……なにイ？ なんで早く連絡しなかった。本当なんだな？ 本当に麻倉次郎吉なんだな？ ああ、わかった。すぐ行く！ 誰一人その部屋から出すな。わかったな？ クソ！ 舐めた真似しやがって！ 待ってろ次郎吉！

平塚、はげ。

すると直ぐに、客席後方から次郎吉が入ってくる。盗んできたばかりの大金を手にしており、それを客席に向かってばら撒く。

次郎吉

ハハハ！ こりゃいいや！ 拾え拾え！ 金だア、お前たち！ 運がいいぜまったく！ こんな光景、死ぬまでに一度ありゃ贅沢つてもんだ。覚えておきな、この俺こそが大泥棒麻倉次郎吉さまよオ！

平塚、次郎吉を追いかけるようにして入り。

平塚

待て、次郎吉！

次郎吉

なぐんだ、来てたのか平塚！

平塚

当たり前だ、待ちやがれ！

次郎吉

待てと言われて待つ泥棒がどこにいる！

平塚

いなぎや生み出すまでだ

次郎吉 お前もしつこい奴だな。俺の行くところ行くところ出てきやがって。あ、ひよつとして暇なん
だろ？ そうなんだろ？

平塚 ふぎけるな！ 俺は、刑事だ。お前を捕まえるのが仕事なんだ。お前がどこへ行こうと、
地の果てまでだだって追いかけてってやる。次郎吉いるところに平塚あり、だ。

次郎吉 なんだア？ 愛の告白かア？

平塚 違うと言ってるだろ！

次郎吉 すまん、平塚。俺は忙しいんだ。お前の相手をしてる暇なんてないんだよ。そんなに俺
に構って欲しいなら

平塚 違う！

次郎吉 まずは金持ちになることから始めるんだな！ 俺は金持ちしか狙わねえ！ ま、お前が
無理なことを承知の上で言ってるのさ。また、会おうぜ平塚。なんだったつけ？ 平塚い
るところに次郎吉あり。あ、逆か！ あばよ！

次郎吉と久美子、残る。

次郎吉、久美子の存在に気がついていない。

次郎吉

に、しても。平塚も相変わらずだよ。平塚が俺を捕まえられないのは、村上春樹がノーベル文学賞取れないのと似たようなもんよ。取れないんじゃないね。取らないんだよ。あいつも一緒。平塚はもうね、俺を捕まえる気なんてないんじゃないかね。困るよ、困る。平塚が本気で俺を捕まえに来てくれないと困る。平塚にその気がないんじゃない、俺だって本気で平塚から逃げられなくなる。それが俺たちの関係なんだからさ。生き甲斐なんだからさ。浜辺でキャツキャツキャツ追いかけっこしてるカッブルじゃないのよ、あれだって同じだよ。捕まえる気なし。「まて〜」って、今日の平塚のあれ、何？ 「まて〜」って。昔は、「待て」のふた文字も随分と尖ってたって言うのにさ、あいつに「待て！」って言われると、こうグサーって刺さったってもんよ。言葉はある意味凶器ってのは本当だね

久美子

あの、

次郎吉、久美子が声をかけたのが自分だとは気がつかずに話を続ける。

次郎吉

まあ、時代が変わったってことなのかな

久美子

あの！

次郎吉

……？

久美子

貴方です。貴方に言っています。

次郎吉

なんだい、お嬢さん。なんか用かい？

久美子

あの、麻倉次郎吉さんですよ

次郎吉

……失せな

久美子

え？

次郎吉

あれだろ？ 麻倉次郎吉ってのは、ここいらじゃ有名な

久美子

はい。盗人です。

次郎吉

罪人じゃねえか。そんな罪人に可愛らしいお嬢さんが何の用があるのかは知らねえけど、

よしたほうがいい。そんな考え捨てちまいな

久美子

まだ私何も言っていないわ

次郎吉

言わなくたって、わかるんだよ

久美子

次郎吉さんなんですよ、本物の。悪いお金持ちばかりを狙う、庶民のヒーロー

次郎吉

ヒーロー？

久美子　　そうです。麻倉次郎吉はこころ一体では有名な悪のヒーローです
次郎吉　ヒーロー？　盗人が？　この俺が？
久美子　今俺って言いました？　そうなんですよね？　私、見ていたんです
次郎吉　残念だけど、別人さ。アンタは俺が罪人に見えるっていうのかい？
久美子　ええ(即答)
次郎吉　ず、随分と正直なお嬢さんだな
久美子　見えるというより、最初から本人だとわかった上で話しかけています。言ったじゃないですか。私、見ていたんです
次郎吉　しつこいお嬢さんだな。いいか？　仮に俺が麻倉次郎吉本人だとしよう
久美子　あくまでも隠し通すおつもりなのね
次郎吉　そりゃそうさ。麻倉次郎吉は罪人なんだぞ。いいから聞けつて。仮に俺が麻倉次郎吉本人だとしよう。お嬢さん、話し方と身なりから察するに……いいとこの子なんじゃないか。いいのかい？　麻倉次郎吉は金落ちをターゲットにする悪党だ。次のターゲットはアンタのどこかもしれないんだぞ。いや、待てよ？　まだ盗みに入っていない金持ちってえと、ごくごく普通の金持ちなんじゃないのか？
久美子　いいえ、違うわ。私のお家は、
次郎吉　さ。とにかく帰った帰った！　俺は麻倉次郎吉なんかじゃない。麻倉次郎吉は、アンタみたいなお嬢さんが関わっていいような相手じゃないんだ
久美子　でも私、見たんです！
次郎吉　何をだよ
久美子　先ほど刑事さんから逃げていたでしよう？
次郎吉　(あちゃーという顔)
久美子　さつきから言ってるじゃない！　そうなんでしよう？　その刑事さんが「待て〜！次郎吉！」「お前なんか捕まるもんか。お前は一生村上春樹でいろよ」って言ったのを私、見ていたんです。
次郎吉　アンタ、見たつてさつきのをか？
久美子　だからずつとそう言っていたのに？
次郎吉　それで？　俺が次郎吉だつてのを確認した上で
久美子　つけてきたんです
次郎吉　おいおい、参ったな
久美子　ええ、参りました。まさか本物の麻倉次郎吉にお会いできるなんて
次郎吉　つけられていることにもさっぱり気がつかなかった。ま、今までのツケが回ってきたってことなのか。金持ちばかり狙ってたんだ。金持ちに報復されたつておかしくない
久美子　報復つて何です？
次郎吉　一生の不覚だ！
久美子　貴方、少し人の話を聞いたほうがいいわ
次郎吉　で、どこだ
久美子　え？
次郎吉　呼んでるんだろ？
久美子　何を？

次郎吉 平塚だよ！ 平塚！ あいつも汚ねえよ。こんな可愛いお嬢さんをよこすなんてさ
久美子 言っている意味がわかりません

次郎吉 え？

久美子 え？

次郎吉と久美子、声を合わせて

次郎吉 え？

久美子 え？

次郎吉 や、だから、通報したんじゃないのか？

久美子 通報？ やっぱり貴方、

次郎吉 (ため息) そうだよ。街を賑わせてる悪のヒーロー麻倉次郎吉さんったあ、俺のことさ。
さ、引き渡すんならさっさと頼むよ。

久美子 (嬉しそう)

次郎吉 ? なんだよ、それ。俺はこれから平塚の野郎に引き渡されるんじゃないのか？

久美子 通報？ 私が？ 警察に？

次郎吉 ……

久美子 するもんですか！

次郎吉 は？

久美子 心配には及ばないわ。警察なんか引き渡したりするもんですか！ せつかく会えたんです。

次郎吉 いや、でも、

久美子 なに？ 捕まりたいの？

次郎吉 そうじゃねえけど

久美子 その代わり、お願いがあるの。私を、助けてほしい

次郎吉 おいおい冗談よせよ！ 盗人だぞ？ 悪人なんだよ、俺は！！ 女なんか助けてられつかよ。なら、

久美子 捕まったほうがマシだって言うの？

次郎吉 ……そうさ

久美子 どうして？

次郎吉 ……

久美子 麻倉次郎吉さん。貴方を漢と見込んで頼みます。私を盗んでほしいの。

次郎吉 嫌だね

久美子 即答?! なぜです? もちろん然るべき額はお支払いします

次郎吉 額の問題じゃねえよ。第一、仕事の依頼なんだ。金を払うのは当然たる

久美子 ……おかしいです。

次郎吉 何がだ

久美子 シナリオと違います

次郎吉 シナリオ？

久美子 練習だっただけなんです。声をかけるのだからって相当な勇気を振り絞ったんですよ？ でも、

さっきのやり取りを偶然見かけて、今しかない！ って、そう思っ

次郎吉 だから何の話なんだ

久美子 なぜ断るんです

次郎吉 俺がお嬢さんを盗むことに、何か利益はあるのかね

久美子 え？

次郎吉 理由はそこだよ。百歩譲って、その盗みを引き受けたとしよう。理由は知らんが、お嬢さんは望みが叶って目的達成だ

久美子 ええ、そうね

次郎吉 じゃあ、俺はどうだ。さすがの俺でも人間を盗んだことは一度もねえ。危険すぎる。もし、

久美子 あるわ。あるわよ、利益

次郎吉 ほう？

久美子 考えて見てちょうだい。貴方が盗み出すのは有名財閥の一人娘よ

次郎吉 有名財閥？ ……そう言うことか

久美子 今まで貴方がしてきたどの派手な盗みよりもこの盗みは話題を呼ぶ。貴方は有名財閥の

一人娘を盗み出し、私は、

次郎吉 悪のヒーロー麻倉次郎吉に盗まれる

久美子 ウィンウィンの取引だと思っけど。しかもこっちは報酬も出すと言っているのよ。

次郎吉 でも、俺が成功するって保証は、

久美子 するわ。貴方は確実に私を盗み出す

次郎吉 言い切るんだな

久美子 ええ。何の考えもなしに発言するバカとは違うわ。何？ 怖いの？

次郎吉 怖かねえさ

久美子 できないの？

次郎吉 ……できないことねえけど

久美子 麻倉次郎吉に盗めないものはないって言うのは嘘だったの？

次郎吉 誰がそんなこと言ったんだ？

久美子 今日一日、街で貴方のことを聞いて歩いていたの。おかげさまで貴方のことがよくわかったわ

次郎吉 街のみんながそう言ってたのか？ 悪のヒーローだとか、盗めないものはないだとか

久美子 ええ、そうよ

次郎吉 言ってくれるぜ

久美子 やってくれるぜ?!

次郎吉 いや、まだやるとは、

久美子 やってくれるのね？

次郎吉 ……ハイハイ。わーっつたよ。やりやいいんだろやりや

久美子 やってくれるのね？ (次郎吉の足を思いつきり踏む)

次郎吉 はい。やります。やらせてください。

久美子 わかればいいのよ、わかれば

次郎吉 で、お嬢さん。アンタ、名前はなんていうんだ

久美子 名前？

次郎吉 いつまでも「お嬢さん」ってわけにはいかないだろ

久美子 嫌よ

次郎吉 はあ？

久美子 言いたくないわ。それに、レデイに名前を聞くなんてセクハラよ

SE サイレン音

警察の音が聞こえてくる。

久美子 なに？

次郎吉 (舌打ち) もう嗅ぎつけてきやがったか。でも、そんなはずは、……(久美子を見る)

久美子 何よ

次郎吉 警察には引き渡さないんじゃないのか？

久美子 違うわ！ 私じゃない！

次郎吉 何ぼーっとしてんだ

久美子 え？

次郎吉 逃げるぞー！

二人、逃げるようにはげ。

後藤若社長と秘書の優菜、入り。

後藤 いや、でもよかったよ。先方が承諾してくれて

社長

後藤 優菜くん。次、何が入ってる

優菜 はい。この後19時半から〇〇〇の社長様との会食の予定です。(会社名は自由で)

後藤 それ、キャンセルできる？

優菜 ええ、まあ。どうかされましたか。

後藤 いや。……アレ、どうなった

優菜 全力で捜索中ですが未だ。

後藤 未だ？

優菜 申し訳ございません。社長のお手を煩わせるようなことは、

後藤 いいんだよ、別に。君の仕事は信用してるんだ。でも、いいかな。現状だけでも耳にい

れておきたい

優菜 ……はい。全力で捜索中ですが未だ。久美子さまにはご友人もいらっしやらないようですし、足取りがつかめないのです。

後藤 協力者がいる。そうだね？

優菜 そう、踏んでおります。

後藤 協力者か。……誰だと思う？

優菜 え？

後藤 麻倉次郎吉

優菜 それって、

後藤 君の仕事は信用してるんだよ？ けどね。どうしても失敗するわけにはいかないんだよ。

優菜 でも、どうして久美子さまが大泥棒朝倉次郎吉なんかと、

後藤 大方、検討はつくけどね。

優菜 ……申し訳ございませんでした。

後藤 ？ どうした

優菜 力不足です。せっかく仕事を任せていただいたのに

後藤 いいんだよ、気にしなくて。僕が心配性なだけさ。

優菜 では？

後藤 もちろん、見張りをつけたよ。そろそろ警視庁のアイツから連絡がくる頃じゃないか

な。

優菜 アイツ？

後藤 全てはシナリオ通りさ。全く、人間というものは愉快だね。自分が踊らされてるとも知

らずにさ。

優菜 ……久美子さまに朝倉次郎吉のことを教えましたね
後藤 いや？ ただ、久美子嬢に朝倉次郎吉の噂が流れるようには細工した。
優菜 だと思いました。
後藤 君もわかってきたじゃないか。(考えるそぶり)
優菜 ?
後藤 あのお嬢様は餓死とかしないだろうか？ あの小娘がいなくなってどのくらい経つ。
優菜 一日です
後藤 たったの？
優菜 そうですよ。一日程度じゃ人間は餓死しません。
後藤 心配性もここまでくると病だな。何分、あの世間知らずの嬢ちゃんだ。飯は腹が減った
優菜 ら勝手に出てくるものだとも思ってるんじゃないか
後藤 まさか！
優菜 わからないよ。あの手の娘は僕らの想像の斜め上をくるからね。でもまあ、一日か。(思
後藤 い出し笑い)
優菜 どうかされましたか？
後藤 いや、一日娘が帰って来なくなったただけであのおっさん狂ったように電話してきやが
つた！
優菜 石崎財閥の代表ですか
後藤 そうさ。たったの一日だぞ！ もうあの嬢ちゃんも16になるっていうのに
優菜 それほど娘さんを愛しておられるのでしょうか
後藤 愛？ わからないな。嫌いなんだよ、愛とかなんだとかは。
優菜 ……
後藤 まあ、見張りもつけてあるし、来週の結婚式には師匠は出ないさ。何にも心配すること
はない
優菜 ですが社長、なぜ居場所を突き止めているのに捕まえにいかないのですか？
後藤 楽しいじゃないか、そっちの方が。いや〜やってくれたよあの子もさ。ただただ結婚式
をあげたんじゃ面白味も何にもない。物語を動かしたのはあの子自身だよ。僕はただ、
その物語にスパイスを添えるだけ。…タダで後藤を捨てるにはあまりにも惜しいか
らな
優菜 後藤くん、
後藤 君らしくないな、社内だぞ
優菜 ……申し訳ございません。
後藤 どうした
優菜 いいのでしょうか
後藤 何がだ
優菜 私は、後藤くんのお役に立てているのでしょうか。
後藤 ……
後藤 時折、不安になるのです。せつかく頂いたお仕事もまともにこなせず、先ほどだつて…
優菜 ……いいんでしょうか、私なんか後藤くんの秘書で
後藤 そんなことを心配していたのか。

優菜 (頷く)

後藤 いいんだよ。君は何にも心配なくていい。この結婚だって、財閥を手に入れるための通過点にすぎない。君には苦勞をかけたっただけだから。なんでも買ってあげよう。何が欲しい？

優菜 私は、

後藤 マンションか？ いいだろう

優菜 いえ。マンションは先日買っていただきました。

後藤 優菜くん、人の話はちゃんと聞くものだよ

優菜 え？

後藤 マンションを買ってやると言ったんだ。一室なんかケチなこと言うわけないだろう
優菜 いりません

後藤 なんだ、不服かい？

後藤 優菜を抱き寄せる

後藤 本当は何が欲しいんだ？

優菜 私は、

後藤 ん？

優菜 私はただ、誰にも邪魔されずにあなたと二人きりの時間が過ごせたら、

後藤 今も二人きりじゃないか？

優菜 そうじゃなくて！

後藤 ははは！ 変わらないな、昔から。……優菜

優菜 はい

後藤 何かを言いかけるが、そこにケータイ電話が鳴る。

後藤 仕方がなく、電話に出る後藤。

後藤 もしもし？ ……ああ、そうだ。何？ やっぱりあいつだったか。問題ない。進めてれ

後藤 電話をしながらそのままはけ。

優菜 その背を見送る。その後、はけ。

三場

☞夕方チャイム

久美子、座って次郎吉のことを待っている。

次郎吉、コンビニ袋を持って入り。おにぎりが入っている。

久美子 お帰りなさい

次郎吉 ……何やってんだ

久美子 何にもやっていないわ。お腹が空いたから、食事を待っているの

次郎吉 待っている？

久美子 黙って家を出てきてから何も食べていないんですもの。でも、おかしいわ。いつもなら

お腹が空いたと思う頃には勝手に食事が出てくるのに

次郎吉 ……

久美子 ねえ、それは何？

次郎吉 ……

久美子 教えてくれたっていいじゃない。わからないことばかりだわ。私ね、一人で家を出たの

初めてだったの。自分の足で、外を初めて歩いたわ。歩くのってとっても疲れるのね。

でもどこへだって行ける。素晴らしいわ

次郎吉、袋からおにぎりを取り出して久美子に投げる。

久美子 これは？

次郎吉 食え

久美子 食べ物なの？

次郎吉 アンタ、握り飯も知らないのか？

久美子 ええ。初めて見たわ（袋のまま食べようとする）

次郎吉 ばか、袋くらいはがせよ

久美子 あ、そういうものなのね（おにぎりを次郎吉に差し出す）

次郎吉 ……

久美子 はがすんでしよう？

次郎吉 自分でやれよ、そのくらい。

久美子 そういうものなの？

次郎吉 そういうものなんだ。いいか？ この世界の、大体のことは自分でやってかなきゃ何ね

えんだ。だれかの手を借りずに、自分の力で生きてかなきゃ何ねえんだよ。ま、お嬢さ

んにそんなこと言っても意味ねえのかもしれないねえがな

久美子 やるわ。自分で。教えなさい。

次郎吉、ため息をつきながら教えてやる。

次郎吉 食い物つてのはな、勝手には出てこねえ。買ってくるなり、作るなりしなくちゃ

久美子 買ってくるなり、作るなり？ これも？

次郎吉 俺は別だ。泥棒なんだから

久美子 まあ！ 盗んだのね！

久美子、おにぎりを無我夢中で食べ始める。

黙って久美子が話すのを待つ次郎吉。

久美子 結婚するの。私、結婚するのよ。

次郎吉 ……そりゃア、よかったな

久美子 良くないわ。好きでもない人と、無理やり結婚させられるのよ。そんなの耐えられない。だから逃げ出したの。政略結婚なんて、絶対にイヤ。

次郎吉 それで？

久美子 え？

次郎吉 どうしたいんだ、これから

久美子

私は、自分が本当に好きな人と結婚したいの。お家が決めた、好きでもない人なんて絶対にイヤ。恋をして、互いに想いあって、結ばれるのよ。結婚ってそういうものじゃない？

次郎吉 俺にはわからねえ話だな。……今なんか聞こえなかったか？

久美子 いえ？ 何にも

次郎吉 ちょっと見てくる。ここで待ってろ

次郎吉 はげ。

音楽「」

華麗なダンスを踊りながら平塚、入り。

平塚 私の久美子さん！ マイプリンセス久美子！！ 今、向かいます！！

久美子 え？ なに？ 何なの？

ダンス終了後、跪いて久美子の手をとる平塚。

平塚 探しましたよ、久美子さん。いや、久美子！！

久美子 キヤッ！ やめてください（手を引つ込める） 何なんですかあなた！

平塚 おや？ この私を知らないの？ そんなバカな！ 警視庁きつての二枚目警部であるこの平塚佐助をご存知ないと！ そうおっしゃるのですね？ わかりました。ならば

自己紹介致しましょう。わたくし 私めは警視庁の平塚佐助と申します。以後、お見知り置き

を。いや、末長く！ お見知り置きを、マイレディ。

久美子 怖いんですけど！ け、警察呼びますよ！

平塚 残念ながら、私その警察なのです。言ったでしょう？ 警視庁きつての二枚目警部だと。いやね、参りましたよ。石崎財閥だか何だか知りませんが、小娘探しの任務なんてねえ！ 正直やりたくないはかったのですが、写真を見て気が変わりました。気をとられました。完全に惹かれました。世間ではこの状況を一目惚れというのでしょうか。が！ 私のは違う！ なぜって！ 一目見る前から貴女に惹かれていたからです！ きつと私たちは前世でも愛し合っていた関係なのでしょう、私の心臓がそう言っています。ドクドクと脈打ったたび教えてくれるのです。運命の人は、貴女。石崎久美子さんののだとー！！

久美子 意味がわかりません……

平塚 奇遇ですね、私もです。街一面に貼られた貴女の写真を見るとなぜか胸が苦しくなって持病の発作が出てしまふ

ゲホゴホと咳き込んで倒れこむ平塚。

久美子 (駆け寄り) 大丈夫ですか？

平塚 近づかないでください(久美子の手をとる)

久美子 え、

平塚 さすが実物は違う。(ゲホゴホ)まるで、天使のようだ！ 愛しています、久美子さん。

久美子 いや、久美子！ 結婚しよう！

五十嵐、入り。

五十嵐 お取り込み中のところ失礼します！

平塚 本当にお取り込み中なんだけど！ 君、誰！

五十嵐 (敬礼)本日付で警視庁に配属になりました、五十嵐美波です！ 平塚警部、よろしくお願ひします！

平塚 五十嵐？ 聞いてないよ！ 君、何歳？

五十嵐 24歳です！

平塚 ババアじゃねえか！ 俺は二十歳以上は認めらんない！ 今さ、見たらわかるでしょ？ 忙しいの。ちよつと後にしてくれる？

五十嵐 警部、こちらのお美しい方は？

平塚 お嫁さん

久美子 はあ？！

平塚 でき、新人。聞いている？ 俺、後にしてくれて言ったんだけど

五十嵐 久美子さんですよ？ 久美子さんじゃないですか！

平塚 気安く呼ぶんじゃない！

五十嵐 えっ

平塚 俺の久美子はな、お前みたいな新人が気安く名前を呼べるようなお方じゃないんだ

久美子 その、俺の久美子っていうのやめてもらえませんか

平塚 なんだ、マイハニー！

五十嵐 ハニー？

久美子 ちよっと刑事さん、助けてくださる？ この人やばい！

五十嵐 すごいです！ もうターゲット見つけちゃったんですか！

久美子 ターゲット？（自分が探されていることによく気がつく）あ、

久美子、さりげなく逃げようとするが五十嵐に捕まってしまう。

五十嵐 あーあーダメですよ。久美子さん、帰らなきゃ。みなさん心配されていますよ

久美子 イヤ！

平塚 嫌がつてるじゃないか、やめたまえ！

五十嵐 アンタどっちの味方なんですか！

平塚 変な質問するんじゃない！ いかなる場合も、久美子の味方だ

五十嵐 いや、久美子さんは保護対象なので、……味方で、間違っってはないか。とにかく！

久美子 帰りましょう！ ね！

久美子 イヤよ！ 離して！

五十嵐 帰りましょう！

久美子 イヤ！

五十嵐 結婚式を控えた花嫁が逃げ出したりなんかしたらダメですよ。ほら、警部もなんか言うてくさいよ。

平塚 結婚……だと？

五十嵐 そうです。捜査資料絶対読んでないでしょ

平塚 本当ですか……久美子さん。結婚、するんですか

久美子 しません！

平塚 ヤッタ！

久美子 だからと言って貴方とするわけでもありません！

平塚 ノン！

五十嵐 いい加減にしてください警部！

平塚 なんだね、配属初日から随分と生意気なんじゃないのか君！

五十嵐 久美子さんは石崎財閥のお嬢さんで、来週結婚式を控えた大事な身体なんです！ それが嫌で逃げ出したみたいですが、それを連れ戻すのが私たちの今回の任務なんですよ！

平塚 なんですとか、なんでなんですか！ 私というものがあいながら、他の男と結婚するっていうんですか！ そんなバカな！ あの言葉は嘘だったんですか？ 私に甘く囁いてくれたあの言葉は嘘だったんですか！

久美子 どの言葉か全く見に覚えがありませんわ。とにかく！ 私は帰りません！ 結婚もしません！ 嫌なんです！

平塚 嫌？ そうか、そうですよね！ ははは！ そりゃそうですよねえ？ 貴女に相応しいのはこの私しかいないんです。平塚佐助こそが久美子さん、貴女に相応しい男なんです！

久美子 そうじゃありません。

五十嵐 警沢なこと言わないでください
久美子 警沢？

五十嵐 結婚は女の子の夢でしょう？

久美子 愛のない結婚もですか。

平塚 引き下がりましょう

五十嵐 え？

平塚 いいです。帰らなくても、いいです。今はまだ。私が必ず貴女のことを奪いに来ます。

愛に愛され互いに愛し、貴女と幸せになって見せます。それでは……行くぞ、三橋。

五十嵐 五十嵐です！

去ろうとする平塚と五十嵐。

そこに次郎吉、戻ってくる

次郎吉 まずいことになった。お嬢さん、ここを出よう。追ってだ。ここにいたら、(平塚に気がつく)……平塚。

平塚 なるほど。協力者がいると言っていたのはお前のことだったのか。どつりで見つからなかったわけだ

誰です？ この人

五十嵐 なんだい？ お前さん、部下ができたのか！ こりゃめでたいじゃねえか！

平塚 新人、

五十嵐 五十嵐です。覚えてください

平塚 麻倉次郎吉って知ってるか？

五十嵐 もちろんです。盗人でありながら、庶民のヒーローとして人気を……まさか？

次郎吉 ほう、随分と教育が行き届いてるじゃねえか。関心だねえ

平塚 新人

五十嵐 はい！

平塚 何故、君は嬉しそうな顔をしているんだ

五十嵐 はい！ だって、私、麻倉次郎吉大好きなんです！

平塚 はア？！

五十嵐 本当は私、次郎吉さんの弟子になりたかったんですよ！

平塚 おま、何言ってるんだ？ まさか、それで刑事になったって言うんじゃないだろうな？

五十嵐 ダメでした？

平塚 もっとこう、刑事魂みたいなかさア、ないわけ？

五十嵐 ありますよ！ 私の家、みんな警察官なんです。だから叩き込まれました、刑事魂で

もそのせいで麻倉次郎吉の弟子になるのは反対されちゃって。

次郎吉 そりゃ、反対されるだろうな

五十嵐 記念に握手してもらってもいいですか？

平塚 おい、

五十嵐 いいじゃないですか！ 握手だけです、握手！

五十嵐、次郎吉と握手をする。
その際に手錠をかける五十嵐。

次郎吉 あ、お前ー！

五十嵐 よし！ 初日から快拳です！ 言ったはずです、刑事魂叩き込まれてるって！ 作戦勝ちです！ 騙される方が悪いんです！

しかし次郎吉、あつという間に鍵を解除する。

五十嵐 あああああー！ なんでええええええええええ？！

次郎吉 悪いな、嬢ちゃん！

平塚 あんなー？ 新人。俺だってこいつに手錠くらいかけたことあんだからなー？

五十嵐 そんなあ！

平塚 そんな甘つちよろい刑事魂で大丈夫かね？

久美子、次郎吉の後ろに隠れる。

平塚 なあ、次郎吉。お前もそろそろ足を洗ったらどうなんだ？

次郎吉 へえ、今日は捕まえに来ねえんだ？

平塚 新人が代わりに捕まえただろ。なあ、冗談で言ってるんじゃないんだぞ

次郎吉 冗談じゃねえならなおさら聞けねえな。行くぞ、お嬢さん

次郎吉、久美子を連れて去ろうとする。

平塚 一緒だったじゃないか

次郎吉 何言ってるんだ？

平塚 俺とお前の、はじまりは一緒だったはずだ。なのにどうして、

次郎吉 忘れたよ。行こう

平塚 お前が幼い頃！

次郎吉 やめろ、平塚

平塚 俺、覚えてんだよ。お前が話してくれたこと。忘れられないんだ。お前の親父、お袋さん置いて、別の女と出て行ったんだよな。その悲しみに耐えられずに、お袋さんは自らの命を絶った

おい、人の過去を公衆の面前で晒すんじゃないよ

次郎吉 独りになったお前は、婆さんのところに引き取られて、そこで毎日暴力を振るわれていた

次郎吉 おい！

平塚 調べが入ってお前は俺がいた孤児院にやって来た。話してくれたじゃないか。

次郎吉 何が言いたいんだ。

平塚 俺はさ、忘れられないんだ。お前の辛い過去を知っていたのに、お前がどんな思いで話

次郎吉

してくれたのかも、全部知ってたのに、お前の手が握れなかった。「友達になろう」そう言って手を差し伸べて来たお前の手を握れなかった。怖かったんだよ。お前は何にも悪くないのに、俺、怖くなって握れなかった

平塚

くだらねえ。そんな昔のこと、忘れたよ。行くぞ（久美子の手をとる）
また、会いに行くから。必ず、お前を捕まえる。行こう五十嵐。

五十嵐

は、はい……。

平塚と五十嵐 はげ。

雨がだんだんと強くなり、響いていく。

四場

ギターを持って入ってくる次郎吉。

久美子

あら、あなた楽器ができるのね。何か聴かせてくれるのかしら。私、音楽は好きよ

音楽「」

拍手して喜ぶ久美子。

次郎吉、生まれて初めて誰かの前で誰かのために演奏し、生まれて初めて拍手がもらえたことに驚き、ピックを落とす。

久美子、それを拾おうとする。

次郎吉も同じようにする。

二人の手が重なる。

恥ずかしがり、お互いにそっぽを浮いてしまう次郎吉と久美子。

次郎吉、何も言わずトランペットを片付け始める。

久美子

久美子。石崎久美子。

次郎吉

(久美子の方を振り返る)

久美子

私の名前。

後藤・優菜・平塚・五十嵐 入り。

五場

久美子、後藤たちの登場に気がつき逃げようとする。

後藤、逃げる久美子を無理矢理捕まえ平手打ち。倒れる久美子。

一同、動くことができない。

久美子

……ごめんなさい

後藤、何も言わずに久美子の髪を引っ張る。

久美子

……ッ!

後藤

君は賢い子だ。そうだろう？ 賢い君にならわかるはずだ。僕がこうして直々に君のことを迎えに来た、この意味が

久美子

……私は……貴方となんか結婚 しないッ……!

後藤、さらに締め上げる。

後藤

ん？ 何か言ったかい？

優菜

社長、

後藤

優菜くん。君は黙っていてくれないか。

優菜

……はい。

後藤

悪いね、久美子さん。なにか言ったのかな。優菜くんが声をかけるもんだから聞こえな

久美子

かったよ

後藤

……いえ。勝手な真似をして、すみませんでした

久美子

ん？

久美子

ご迷惑をおかけしました……ごめんなさい。(泣き出す)ごめんなさい、ごめんなさい、

久美子

ごめんなさい(謝り続ける)

平塚

おい!!

後藤、手を離す。久美子倒れこむ。助けに行く優菜。

後藤

なんだね、平塚警部。

平塚

……見るに堪えませんか。

後藤

おっと、失礼。なに、主人の元を逃げ出したメス犬に少々睨をね。

次郎吉

アンタ、狂ってるよ

後藤

おや？ 誰かと思えば大泥棒麻倉次郎吉じゃありませんか。うちのが随分とお世話に

なったようで。で、なんです？ 僕が狂ってる？

次郎吉 アンタの婚約者だろう

後藤 (ニヤリと笑う) どうしました？ 顔色が真っ青だ。さては、昔のことを思い出したか？

次郎吉 お前……！ (後藤に殴りかかろうとする)

平塚 (それを止めて) やめろ、次郎吉

後藤 おや、随分と親しいようで。

平塚 いえ。私の主な任務はコイツを捕まえることなので。

後藤 それだけですか？ 本当に？

平塚 ……調べたんですか

後藤 ええまあ、一通りね。だって不安じゃないですか。(久美子のことを抱きしめながら) 大事な大事な婚約者が失踪したんです。怖い目にあつてないか、捜査を依頼する刑事さんは信頼できる人間なのか。不安じゃないですか。いや、驚きましたよ。まさか、警視庁きつてのキレ者と名高い平塚警部殿と大泥棒麻倉次郎吉が旧知の仲だったなんてねえ！ ええ？ 警部殿は先ほど麻倉次郎吉を捕まえるのが主な任務と言っていましたか、あるんですかね？ 捕まえる気。

五十嵐 ああ。

後藤 おや？

平塚 やめろ、五十嵐。下がれ。

五十嵐 下がりません。だって、おかしいじゃないですか。なんでみんな黙ったまんまなんですか。何にも思わないんですか。

後藤 君は確か？

五十嵐 五十嵐です。平塚警部の部下の

後藤 平塚警部、

平塚 申し訳ございません。おい、五十嵐。

五十嵐 後藤さん、

平塚 五十嵐！

五十嵐 だって！ こんなおかしい状況なのに黙って聞いてろっていうんですか？ そんなの

私できません。自分の婚約者に暴力振るうだなんてどう考えても、

五十嵐 五十嵐！ (無理矢理引き戻す) いいから。

平塚 なにがいいんですか！ 何にもよくないです！

久美子 (大きな声で) みなさん……！ ……この度は私の軽率な判断、行動で大変ご迷惑をおかけしました。……帰りますから、私。だからもういいです。やめてください。次郎吉さん、ありがとう。

次郎吉 俺は！

そこに、パトカーのサイレンの音が聞こえてくる。

声

いたぞー！！

久美子、次郎吉を見ようとしない。
次郎吉、声とは逆の方向に逃げる。

久美子 優菜さん

優菜 はい

久美子 肩を貸してください？

優菜 もちろんです、久美子さま

久美子、優菜に支えられはけ。

後藤 平塚警部。

平塚 はい

後藤 ご苦労だった(封筒を渡す)ご協力感謝する。いや？ 君らは何もしていないか。ははは！ 引き続きよろしく頼むよ。部下への教育はしっかりとな。

笑いながら後藤、はけ。

五十嵐、はけて行こうとする後藤に突っかかろうとする。それを諭す平塚。

五十嵐、はけ。

雨の降る中、無線が響く。

無線(声) こちら平塚班。対象を無事保護。未だ次郎吉逃亡中。繰り返す。未だ次郎吉逃亡中。応援を要請する。

平塚、はけ。

六場

後藤、久美子、優菜入り。

久美子 もう大丈夫です。逃げたりしませんから。自分で歩けます。

後藤 囚われの姫君、か。

優菜 これもシナリオ通りですか

後藤 いいや？ いわば、番外編さ。これだから人生は面白い。

久美子 なにが面白いのかさっぱりわからないわ。

後藤 なんとでも言いたまえ。今の君は籠の中で可愛くさえずる鳥でしかないんだからな。

久美子 なぜ、私にこだわるの。私は、愛のない結婚なんて絶対イヤ。私、知っているのよ。

後藤 優菜くん

優菜 はい、この後の予定は全てキャンセルしてあります。

後藤 こないだの〇〇社の社長さん、あの後怒ってなかった？

優菜 ええ。きちんと、私の方からお話しておきましたので

後藤 今回もよろしく頼むよ。いろんなところの社長さんから言われるんだ。またよろしく頼

むってね。(優菜の腰に手を置きながら)

優菜 承知致しました。滞りなく。

後藤 来週が待ち遠しいな。

後藤、はげ。

久美子 ……

優菜 失礼します。

久美子 ねえ、

優菜 ?

久美子 ……なんでもないわ。

優菜、はげ。

久美子部屋に一人残される。軟禁状態。

久美子、歌のシーン。

そこに次郎吉、入り。

次郎吉 (拍手)

久美子 (驚く) ……どうして、

次郎吉 助けに来た

久美子 そんな、嘘よ……だって、警備だってたくさん、

次郎吉 麻倉次郎吉に潜れない警備なんてない。必ず穴は存在するんだ。どんなに硬い警備でも

久美子 でも、

次郎吉 行こう

久美子 え？

次郎吉 行こう。逃げよう

久美子 無理よ、不可能だわ。見たでしょう。どんなに逃げたとしても、あの男は必ず追ってくる。逃げられっこないのよ。私は、籠の中で哀れにさえずる鳥よ。今更天空にはばたかうだなんて無理な話だったのよ。

次郎吉 それがなんだ

久美子 ……

次郎吉 なんだっていうんだ。言っただはずだ。麻倉次郎吉に潜れない警備なんてない。逃げられないことなんてないんだよ

久美子 無理よ。私、行けない。

次郎吉 なんでだ、このままじゃ

久美子 いいの。これでいいのよ。帰ってちょうだい。

次郎吉 ……

久美子 これは、私の本心よ。いいえ。これが、私の本心なの。

嫌なのよ。言っただでしょう？ もうこれ以上、貴方に迷惑をかけることはできない。単なる私のわがままに、貴方をこれ以上巻き込めない。行きたい、行きたい、行きたい！でも、行けないの。いいえ、違うわ。行かない。私、貴方と一緒にには行かない。ここで、一生が終わるのを待つ。次郎吉さん、ありがとう。私、夢を見たわ。いい夢だった。契約は破棄します。その引き出しに、小切手が入っているはずよ。持って行きなさい。もう、ここへは来ないと誓ってください。二度と会うことはないでしょう。さあ、早く、行って！……行きなさい！

次郎吉、憤りと悔しさが入り混じり、何かを言おうとするがそれを飲み込みぐつと堪える。その後、はけ。

久美子、声を殺して涙する。

平塚、入り。

久美子 だれ？

平塚 警視庁の平塚です

久美子 今は一人にしていただけですか

平塚 来ていたのでしょうか？

久美子 ……なんのことかしら

平塚

わかるんですよ、私には。奴とは、刑事と盗人になる以前からの古い付き合いでして。ひとつ、無粋なことをお聞きしますが、良かったのですか。その決断で。

久美子 聞いていたのね。いいわ。入って頂戴。

平塚、久美子の部屋に入る。

久美子

盗み聞きとは、いいご趣味ね。

平塚

失礼。滅相もない！ たまたまですよ。たまたま通りかかったら、たまたま、聞こえてきて、またまたたまたま 久美子お嬢さまの会話の相手が、

久美子

わかりづらいわ。どっちにしても、貴方には関係のないことよ。

平塚

そうかもしれません。少なくとも貴女の抱えている問題については。が、先ほども言いましたとおり、私めと平塚は古くからの知り合いなもので。どうしても気になってしま

久美子

うこの気持ちをお許しください

平塚

わかったわ。貴方には敵いそうもない

久美子

褒め言葉と受け取りましょう。

平塚

話していただけるのかしら、貴方と、私と次郎吉は、孤児院で一緒だったんです。知っていますか？ 孤児院 石崎財閥のお

嬢さんにはわからないかなあ。親に恵まれなかった子や、みなしご 孤児が集まるところです

久美子

聞いたことはあるわ。

平塚

次郎吉とは、そこで一緒だったんですよ

久美子

あの時話してた、

平塚

あっ（笑う）そうでした。公衆の面前で俺、あいつの過去を晒したんだった

久美子

大変でしたのね

平塚

それが、そうでもないんです。私にとってはそれが普通でしたから。生まれた時からあそこにいると、親両親がいないことも、別に苦じゃなかった。施設のみなが家族でしたから。でも、あいつは違う。あいつは、後から院に來ました。両親の記憶をしっかりと持っているのと持っていないのとでは、苦勞は比べものになりません。

久美子

そうですか

平塚

あの時間聞いていたならわかりますよね？ 後悔は、ずっと残ったままです。あの時の後悔は残ったままなんです。あいつの、次郎吉の手を俺は取れなかった。その事実は、もう変わらないんです

久美子

何をおっしゃりたいのか、私にはわかりません。

平塚

貴女は聡明な方だ。本当は、わかっているんでしょう？ 全てわかった上で、今、こうしておられる。俺は、そんな貴女を見ていられない。

久美子

昔の自分を見ているようで辛い、ですか？

平塚

おこがましいのは承知の上です。それでも、言わせてください。自分の気持ちには、正直になつたほうがいい。

久美子

いいんです。これで、いいんです

平塚

好きなんでしょう？

久美子

……

平塚 その顔は、イエスの顔だ。どうです？ 違いますか？
貴方ね、

平塚 失礼。でも、あっているはずだ。これは、刑事の勘ってやつです。決められたレールの上を歩く人生もまた一つの道ですが、自分の本心に掴みたい道を歩いたっていいじゃないですか。たとえそれが茨の道だろうと、嶮^{けわ}しかろうと、自分以外誰一人歩いていない道だろうと、歩けばいいじゃないですか。貴女は人形じゃないんだ。いいんです。歩いたっていいんです。貴女は石崎久美子という一人の人間なんだ。幸せになる権利がある。諦める必要なんてどこにもありません。貴女には、後悔して欲しくない。後悔の先にあるのは、孤独です。どうしようもない孤独です。貴女には貴女の道を歩んで欲しい。幸せになってください。

五十嵐 入り。

五十嵐 平塚警部、お取り込み中のところすみません

平塚 あーもう、新人！ お前、本当に間が悪いな！ そんなにお取り込み中が好きか！ やめます

五十嵐 ああ、いい心がけだ。人生においてタイミングというのはだな、そうじゃありません。

五十嵐 短い間でしたが、お世話になりました。平塚警部の下でこれ以上働くことはできません。

平塚 一身上の都合というやつかな？ ならば仕方があるまい

五十嵐 違います。理解できないんです。理解できないんです、警部のことが。

平塚 理解できない？ する必要もないだろう。なんだその、恋人に別れを告げる時のような台詞は。(小芝居風に) もう貴方のことが理解できないの〜

五十嵐 とぼけるのもいい加減にしてください。理解できないんですよ。貴方のその、刑事^{デカ}としての在り方が！ ふざけるのもいい加減にしてください。刑事は、……正義は公平であるべきなのに、貴方は私情に身を委ね、感情論で捜査をする！ そんなの、刑事として間違っている

平塚 お前も若いな

五十嵐 若さの問題ではありません

平塚 いいや、お前は若いよ。いいか？ 五十嵐、よく聞けよ。お前が俺の下を去ると言うのなら、これが俺からの最後の……刑事としてのアドバイスになる。警察ってのは、悪い奴を捕まえるのが仕事だと思っっているようだが、それは違う。

五十嵐 まだそんなこと言ってるん

平塚 (遮るように) 最後まで聞け！

五十嵐 ……

平塚 いいか？ 警察ってのは、悪事を犯した奴の心を唯一救ってやることのできる職業な

んだ。お前も人間なんだからよオ、情の一つや二つ持ち合わせていないと、人間を愛せないぞ。愛だ、五十嵐。愛せ。人を殺したいほど憎むから、殺したいほど愛することができるんだ。ちゃんと憎んで、ちゃんと愛せ。

五十嵐 平塚さん、アンタこそわかってないんじゃないですか。あります？ 人を殺したいほど憎んだことあるんですか。私は、もつと上に行きたいんです。行かなきゃいけないんです。こんな盗みだとか誘拐だとか小さな事件、相手にしてらんないんですよ。

平塚 小さな事件、

五十嵐 だってそうじゃないですか。私は、正義のために命をかける、そういう身体張った仕事をした。そう思って、警察入ったんです。

平塚 五十嵐

五十嵐 わかっていますよ。わかっています。ありますよ、私は。人を殺したいほど憎んだことです。私の憧れの警察官。言ったじゃないですか、私の家 警察の家系なんです。父の大きな背中に憧れて、追いつきたくて、追いつけなくて。そりゃ追いつけるわけないんです。父は、任務の途中、人を守って殉職しました。正義は公平であるべきです。父の行動は確かに正しかった。でも、私を残して死んでいった父が、許せない。こういうことですよね？ 違いますか？ 私は、誰も死なない世界を作りたい。平塚警部、

平塚 ……

五十嵐 お世話になりました。

五十嵐 去ろうとする。

平塚 五十嵐、

五十嵐 ……

平塚 俺が殺したいほど憎んでるのは、俺自身だ。

五十嵐 失礼します

五十嵐 はげ

平塚、久美子連れて反対側にはげ。

七場

次郎吉 入り。

手には、換金済みのお金を持っている。

平塚、入り。

平塚 おい

来ると思っていたよ、平塚。よほど暇なんだな、警察とやらは。

平塚 俺たち暇な方がいいんだよ。平和な証拠だ。ま、あいにく俺は大忙しだがね

次郎吉 へえ、事件か？

平塚 それ、本気で言ってるのか？ 言っただろ、次郎吉現るところに平塚あり。俺はお前さんの相手で大忙しなのさ

次郎吉 ……

平塚 お前、このまま何もしないつもりか

次郎吉 あいにく、あの仕事は終わったんだ。見ろよ、これ。報酬。多いくらいだよ。やつぱす

ごいな、財閥ってのは。わかんねえな、金持ちってのは

平塚 お前、

次郎吉 おっと、それ以上は言っちゃいけない。お前の問いかけについてはイエスだよ。何にもしない。もう、終わったんだ。この件からは手を引くし、自首だつてするもんか

平塚 泣いてたぞ

次郎吉 ……

平塚 久美子さん、泣いてたぞ

次郎吉 久美子？ そんな小娘、知らねえなア

平塚、次郎吉を殴る。

次郎吉 ……いてえ

平塚 当たり前だ。殴ったんだからな。俺だつていてえよ

次郎吉 ……

平塚 なぜ逃げる。

次郎吉 ……

平塚 答えろ、なぜ逃げると聞いている

次郎吉 冗談よせよ、俺は盗人。お前は刑事。逃げるのは当たり前だろ

平塚 違う！ お前、俺の言いたいことわかってるんだろ？

次郎吉 なに？ 何、どうしたっていうんだよ

次郎吉 笑ってみせるが頬に涙がつたう

平塚 お前、泣いてんのか？

次郎吉 (急いで拭う) ……あれ

平塚 答えは出ているんじゃないのか。じゃないと、

次郎吉 どうしたってんだよ

平塚 どうしたのはお前だよ！ 俺はどうもしてねえ、どうかしてんのはお前だ、麻倉次郎

吉！ どうしてそうやって逃げてばかりいるんだ。そりゃ、お前は盗人だから逃げるのも仕事のうちかもしれない。けど、俺の知ってる麻倉次郎吉という男は、自分自身からも逃げるような男じゃなかった！ 手に入れたいと思ったものはなんだろうと手に入れる。悪のヒーロー麻倉次郎吉は、獲物を逃したことなく一度もないはずだ

次郎吉 それが警察の言葉かね

平塚 ああ、撤回しよう。俺もどうかしてるな。また五十嵐に叱られちゃう。なあ、お前が欲

しかったものって金か？ 金は手に入ったものの持たされてない自分がいる。そうだろう、次郎吉。

次郎吉 イヤだね、警部殿に盗人の俺の気持ち理解されちゃうとは。確かに、今回の仕事はち

と不完全燃焼などところがある。何か足りていない。それはわかっちゃいるんだ。だが、それがなんなのかが、わからない

簡単な話じゃないか。愛だよ

平塚 は？

なんでこうも(ため息)最近愛について語ることが多くて参っちゃうよ

次郎吉 らしくないじゃないか

平塚 そうなんだよ。そんなキャラじゃねえんだよ、俺は。ただ、そうならなきやいけないときもあるんだよ、世の中さ。次郎吉、特にお前みたいな不器用な一人にはね

次郎吉 不器用な二人？

平塚 おいおい、自覚なしか？ 自覚なし野郎のためにこの平塚佐助は自らの恋から身を引いたってのか？ 勘弁してくれよ。警察はな、お人好しじゃないんだ

次郎吉 何を言っているのかわからない

平塚 そうだな、つまり…：愛はお金じゃ買えないってことだよ。なあ、次郎吉、愛は金じゃ買えねえんだ。今回の仕事で金は手に入ったかもしれない。でも、本当に欲しいものは手に入っていないはずだ。誰かに必要とされるのは嬉しいけど、捨てられるのは、見捨てられるのは嫌だからお前は金にすがってる。いつまでも盗みをやめねえ。そりゃそうだよなあ。金は裏切らねえもんなあ(煽る)

次郎吉 (平塚に掴みかかる)

平塚 凶星なんだろ

放っておいてくれよ。

平塚 それがさっきの涙の理由なんだろ。俺、お前の泣いてるとこ初めて見たよ。園長先生が捕まって園のみんなバラバラになった時だってお前、泣かなかったのに。

次郎吉 お前、あん時先生のこと捕まえたおっさんのところにもらわれたんだっけ

平塚 ……だとなんなんだ

次郎吉 どうして刑事になったんだ。俺らをバラバラにしたやつのもとでよく生きてられたな。

平塚 俺らがあの孤児院で過ごした時間ってそんなもんだったか。俺だったら、うるさい！ どうだっていいだろ

次郎吉 なんて、先生オヤジが捕まったか、お前、知ってる？ お義父さまから聞いたか？

平塚 ……

次郎吉 あいつ、泥棒だったんだ

平塚 ……

次郎吉 泥棒した金で、俺らのこと育ててたんだよ。なあ、正義ってなんだ。俺は自分がやって

きた盗みを悪だとは思わない。オヤジ先生を悪だとは思わない。お前ら警察は、

平塚

俺ら警察は、心を救うのが仕事だ。…義父さんの言葉だ。知ってたよ。園長先生のこと。俺は、救いたいだけなんだよ。お前のことも、あの頃の俺らのことも。なあ、もういいんじゃないのか。先生と同じ道を辿るのもいいけど、お前もそろそろ、（言葉を飲み込む）（自分の人生を歩いてもいいんじゃないのか、と言いたい）…俺は！

次郎吉 なんだよ、急に

平塚 俺は、久美子さんが好きだ。でも、俺じゃダメなんだ。

次郎吉 他に好きなやつでもないのか

平塚 お前、それ本気で言ってるのか

次郎吉 回りにくい。何が言いたい

俺は、俺は、潔く身を引きたいんだ。引きたいんだよ、引かせてくれよ。なあ、次郎吉 お前に愛をくれた人は誰だ。愛を知らなかったお前に、愛をくれたのは誰だ。次郎吉 今ならわかるはずだ。目を背けるな。誠実に生きろ。もう一度聞く。お前に愛を教えてくれたのは誰だ。

次郎吉 言えない

平塚 え？

怖いんだよ。人を信じるのが、怖いんだ。口にしたら認めるってことだろう？ 確かにあるよ。お前の言う通り、俺の中に、彼女と一緒にいたいという気持ちがある、確かに生きている。でも、怖いんだ。俺は一人でいい。一人の方がずっといい。誰かと一緒にいたいけないんだよ、俺みたいなやつは。誰かからの愛を感じるだなんておこがましい話なんだ。人はいつか裏切る。俺は知っている。だから、言えない。

平塚 随分と自分勝手なやつだな

こればかりは、どうしようもない。お前も、わかるだろ。人には生きてきた人生がある。変えようがないその人生が、自分という人間を形成している。

平塚

それでも抗う姿がたまらなく人間臭くて、美しいんじゃないか。次郎吉 考えたことはあるか。俺たちには想像することしかできんが、それでも考えることに意味があると俺は思う。大きな大きな家でひとりぼっちの女の子のことを考えたことがあるか。財閥のお嬢さんが、たった一人でお前に声をかけた時の気持ちを考えたことがあるか。自分で何かをしようとしたのは初めてだったかもしれない。きつと心細かったらうに

次郎吉 ……

平塚 余計なことを考えるのはよせ。彼女にしっかりと向き合おうんだ。もう一度聞こう。お前

八場

式場控え室。

ウエディングドレスに身を包んだ久美子、座っている。

優菜、入り。

優菜　そろそろお時間です。

久美子、何も答えず久美子に背を向けたまま。

しばらくの間。

久美子

いいの？

優菜

……何がです

久美子

私、結婚するのよ

優菜

ええ

久美子

好きなんでしょう、彼のこと。

優菜

久美子さま、式に遅れます

久美子

知っているのよ、私。なぜそんなに、平気でいられるの

優菜

これが、仕事ですので。(笑顔)

久美子

……

優菜

ありがとうございます

久美子

え？

優菜

気にかけてくださり、ありがとうございます

久美子

わからないわ。私には、貴女が理解できない。私は、後藤のことなんてこれっぽっちも好きじゃないのよ。それは向こうも同じで、彼は貴女を貴女は彼を。貴女たちは通じ合っているじゃないの。

優菜

いいえ。そんなことはありません。彼は我が社の希望で、私は一秘書にすぎません。いいんです。そばにいられさえすればいいんです。私はそれでいいんです。後藤くんが幸せなら、それで。後藤くんのやりたいことについて行くだけです。

久美子、優菜を見つめる。

真剣な目で見つめられ優菜、ため息をひとつ。

優菜

貴女って人は……。ええ、好きですよ。彼のこと、明日をまっすぐと見据えたあの目が、私は好きなんです。けど、その視線の先に私はいません

久美子

そんなことないわ

優菜

あるんです。わかるんです、そのくらい。ずっと側にいましたから。……悔しいです。彼の視線の先にいる貴女が羨ましいです。

久美子

後藤が見ている私は、

優菜

そうかもしれない。けど、今の私にはそれすらも。隣にいることはできるけど、見つめ合うことは叶わない。

久美子

本当に好きなのね

優菜

ええ。それはもう。

久美子

なら……！

鐘の音が聞こえてくる。

音楽「G線上のアリア」

優菜

さ、式が始まります。

後藤、三段階段の上から登場。

神父の言葉が録音で流れる。

神父

汝、後藤尚三郎は、この女石崎久美子を妻とし、良き時も健やかなる時も、共に歩み、他の者の依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻のみに添うことを、神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？

九場

新郎後藤と新婦久美子。

誓いのキスをしようとしたところに、次郎吉 入り。

次郎吉

本日はお日柄もよく、お二人の大変めでたい式にこうしてお招き頂けたこと、心から嬉しく思う所存でございます。……やあ、お嬢さん。ごきげんよう。へえ。よく似合っているじゃないか。

久美子

どうして……もう来ないでって言ったのに……

次郎吉

そんなの、俺がそうしたいからそうする。それだけだ。ミュージック！

音楽「」

次郎吉

大泥棒麻倉次郎吉！ 石崎財閥のお嬢さん 石崎久美子を盗みに参上致しました！ あんな、お嬢さん。よく覚えておくといい。俺は、悪のヒーローなんかじゃない。正真正銘の悪党なんだ。大泥棒なんだよ。どう生きたってそりゃ変わるもんじゃねえ。だから俺は、俺の信じる道を突き進む。親愛なる友人、紳士淑女の皆さま。本日はこのような席にご臨席賜りありがとうございます。余興は楽しんで頂けましたでしょうか。ここからが見せ所でございます！ 花嫁奪還の儀、とくとご覧あれ！

後藤

ほう。我々の結婚式は余興に過ぎないと、そう言いたいのか、君は。優菜くん

優菜

はい

後藤

奴の好きにはさせるな

優菜、次郎吉を止めようと向かっていく。

優菜と次郎吉の殺陣。

次郎吉

アンタもつくづく、報われない人生だな

優菜

貴方には関係ありません

次郎吉

いいのか、それで

優菜

なんなんですか。貴方と言い、久美子さまと言い！

次郎吉

わざとやられたフリをしろ

優菜

え？

次郎吉

いいから！ 向こうにアンタのためのドレスを用意した。幸せになる権利は誰にだつてあるんだ。惚れた男の前では可愛く生きろ。さあ！

次郎吉、優菜に決定的な一撃を食らわす。

優菜、やられたフリをしてはけ。

向かってくる平塚。

平塚
曲変えろ！

音楽「」

平塚と次郎吉の殺陣。

次郎吉
よお、親愛なる友人。俺はよくわかるのだが、友人同士はこんなことするもんなのか

ね

平塚
これははじめだ兄弟。俺たちは、友人である以上に盗人と刑事だ。教えてやろう、こう

いう友人関係を好敵手ライバルという

次郎吉
手エ抜くなよ

平塚
お前こそ

激しい戦いが続く。

平塚、次郎吉に吹っ飛ばされる。

負けたが、満足気な顔。

次郎吉、後藤に向かう。

後藤
いいシナリオだよ、麻倉次郎吉。悪役に選んで頂けて光栄だ。

次郎吉
欲望に忠実なのはいいが、女泣かせるのは漢がなっちゃいねえってもんだぜ

後藤
面白い、実に面白いよ。麻倉次郎吉、君は紛れもないヒーローだ。

後藤と次郎吉の殺陣。

激闘。

後藤
ずっと君のことが気になっていたんだ。

次郎吉
なんだって？

後藤
街の皆は君に心酔している。君のカリスマ性は大したもんだ。どうだい？ 我が社で働

かないかね？

冗談はやめてくれ

後藤
そうか……それはとても残念だ。イエスと答えていたのならば命が助かったものを

後藤、拳銃を取り出し構える。

次郎吉

卑怯だぞ！

後藤

なあに、これも物語のセオリーというものさ

弾を装填する音が冷たく響く。

後藤 悪役は一人で充分だ。

五十嵐 入り

後藤 なんだ？

五十嵐 お取り込み中のところすみません！

平塚 カー！ やってくれたなお前！

五十嵐 平塚警部、貴方はおっしゃいました。警察官は、悪い奴を捕まえるのだけが仕事ではない、警察官は悪い奴の心を救ってあげるものなのだ。私は、今の場面で心を救うためにはこれが必要だと考えます！ 私は、私の美学を、私の考える正義を貫かせていただきます！ 五十嵐美波、二人の戦いに花を添えて見せましょう

五十嵐、花吹雪を散らす。

後藤 平塚警部！ なんだねこれは！

平塚 ウチの自慢の部下がご迷惑をおかけしてすみません！ いいぞ五十嵐！ もっとやれ！ とところで、片付けのことは考えてるかあ？！

五十嵐 忘れてましたあー！

花吹雪、なぜか後藤に重点的に降りかかる。イラつく後藤。

次郎吉、その隙に久美子を奪還。

花吹雪が止み、後藤が顔をあげた時には久美子と次郎吉はおらず、ドレス着替えた優菜が立っている。

優菜 後藤くん、

後藤 優菜……これは一体、

優菜 後藤くん、私、

後藤 早く、あいつらを！

優菜 貴方が好きなの……！！

後藤 ……………え？

優菜 ずっとずっと、好きでした。

後藤 何を、

優菜 気づいてなかった？ そうだよ。ずっとこの結婚式のために一直線だったもんね。

後藤 これは、……いや、

優菜 後藤くんは、不器用なだけなんです。夢に一直線なだけなんです。ただ、少し頑張る方向を間違えてしまっただけなんです。

後藤 やめるんだ、

優菜 やめません。私やめません！ 今度は私が止めてみせる！ 後藤くんが間違った方向に進もうとしていたら、今度こそ私が止めてみせる！ だって、好きなんです！ 私、貴

方のことが、大好きなんです！ ありがとう、私のために頑張ってくれて。

優菜、後藤に抱きつく。

愛を確かめ合う二人。

久美子 次郎吉さん、なんで来たの。なんで、こんなことをしたの

次郎吉 迷惑だったかな。それにしちや、嬉しそうじゃないか。

久美子 そんなことないわ

次郎吉 本当か？

久美子 ええ。本当よ

次郎吉 俺の目を見て言ってみろ

久美子 本当だってば

次郎吉 ほら、

久美子 ……いいわ

見つめ合う二人。

次郎吉 言ってみな

次郎吉、どこから取り出したおにぎりを久美子の口に突っ込む。

久美子 ……しよっぱい

次郎吉 俺が握った。ありがたく思え

久美子 今のはキスの流れじゃなかったかしら

次郎吉 ラブストーリーには疎いんだ

久美子 ダメね

次郎吉 どうだ、美味いか

久美子 ええ。でもしよっぱいわ

次郎吉 初めて作ったんだ

久美子 盗んで来たんじゃないのね

次郎吉 その方が良かった？

久美子 いいえ。でも、本当にしよっぱい

次郎吉 そんなに？

久美子 貴方も食べてみればいいのよ

次郎吉、久美子の食べかけを口に入れる

次郎吉 ……本当だ。食べたもんじゃない

久美子 ……るから

次郎吉 え？

久美子 私が作るから。私が、貴方が盗みなんかしないように美味しいおにぎりを作り続けるわ

次郎吉 それって、

久美子 そ、それに！ 貴方はもう盗みなんて必要のないはずよ。だって、貴方は最高のお宝を

盗んだじゃない

次郎吉 自分で言うかね？

久美子 私が最後じゃ不満かしら？

次郎吉 (笑う)

久美子 何よ、そんなに笑わなかったっていいじゃない。

次郎吉 よかった。

久美子 え？

次郎吉 俺の最初が、あんたでよかった。

久美子 最後じゃなくて？

次郎吉 石崎久美子さん。一度盗んだお宝を、手放すような真似はもう二度としない。きちんと

言わせてくれ。久美子。アンタの人生、丸ごと盗ませていただくぜ

事態を受けた200人の警察が二人を囲む。

背合わせになる次郎吉と久美子。

次郎吉 おや、お祝いしに来てくれたのかな。

久美子 そんなわけではないでしょう

次郎吉 いいのかい？

久美子 いいわ。退屈しなさそう。

次郎吉 残念だったな諸君！ 人生における愛つてのは、これが面白えことに灰色だった俺の世界を彩ってくれた。盗んでも盗んでも満たされなかった俺の心が、今はたった一人の女を愛おしく思う気持ちで満たされてる。俺にとつてこいつは、石崎久美子という女は、俺の泥棒人生に終止符を打つ最後の、それでもって最高のお宝だ。二人の愛を邪魔しようなんぞという輩がいるなら遠慮なくかかってこい。俺が必ず守り抜いてみせる。麻倉次郎吉、一世二代の大舞台だ。

終幕

カーテンコール

本作品を上演する場合は、事前に許可を得てください。

劇団天の河神社

Mail address

info.gekidan.amanogawazinzya@gmail.com

ホームページ

<https://amanogawa77.amebaownd.com>